

## 5月号の書籍紹介

### 『雨にシュクラン』

こまつあやこ 著

講談社、2023年4月10日出版、

ISBN978-4-06-529283-9、1400円（税別）

本書はこまつあやこさん作の児童文学である。こまつあやこさんは主に高校生を主人公にして、イスラームやアラビア語に関心をもって新しい世界との出会いを大切にするといったテーマの下で作品を手掛けていて、これまでに講談社児童文学新人賞や日本児童文学者協会新人賞を受賞している。

本書のあらすじは、書道に憧れて志望の高校にはいったものの通学距離が長く、1学期だけで退学してしまい、高校中退という予想外の劣等感に悩まされながら、図書館のボランティアを始めた少女が、ふとした契機でトルコ料理店を営む家族と知り合い、アラビア語書道に出会って生きがいと自信を取り戻していく過程が、少女の目を通して優しい筆致で描かれている。

はじめはアラビア語書道もトルコ人家庭との交流も物珍しいものを見るような感覚だったが、初歩のアラビア語書道を学ぶことによって、トルコ人家族と親しくなり、やがてイスラームに関心を抱き始める。そしてトルコ人家庭の少年に淡い恋心を抱きながら、彼らが通学する近くの高校に編入して、共に歩み始めるまでを感性豊かな少女の目を通して描かれている。

やってみなければ分からないこと、会うことがなければいつまでも知らないままになってしまうことなども、少しのチャンスと勇気があれば、異文化に接することで若者の感受性が豊かになること、そして優しく柔らかい気持ちで新しい世界に接することによって、やがて相互理解が深まることなど、本書は多くのことを教えてくれる。若い人だけでなく、大人にも心の中の世界が広がることを教えてくれるから書名が「シュクラン（ありがとう）」なのでしょう。

『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 5

記憶と記録にみる女性たちと百年』

長沢栄治 監修

岡 真理/後藤絵美 編著

明石書店、2023年3月31日

ISBN987-4-7503-5564-1、2500円＋税

『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 6

うつりゆく家族』

長沢栄治 監修

竹村和朗 編著

明石書店、2023年3月31日

ISBN987-4-7503-5565-8、2500円＋税

この2冊は東京大学名誉教授の長沢栄治先生を代表とする「日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（A）「イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究」、および「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」の成果としてこれまでに出版された6巻のうちの第5巻と第6巻である。

第5巻は「イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究」の公募研究『『砂漠の探究者』を探して——女性たちと百年』を基盤として、総勢23人の研究者が主にそれぞれのテーマに沿った現地調査をもとにして、「イスラーム社会の女性の生き方」を『記憶と記録にみる女性たちと百年』に描いている。

厳格なイスラーム法の下で暮らすムスリマたちにとって、ヴェールを付けるか否かということは、実は命がけの大問題である。このヴェール問題から始まったジェンダー平等を求める運動はイスラーム地域各地に波及したが、社会全体に定着し容認されることは、多くの場合、なかったため、女性たちにとっては今日でも命がけの運動なのである。

イスラーム社会での宗教回帰の度合いは、真っ先に若い女性の服装にあらわれる。筆者が前後3回8年近くを過ごしたカイロでも、1970年代にはいると若い高学歴の女性が一斉にヴェールを被り足元まで隠れるような長いスカートを履くようになった。筆者が最初にカイロで暮らしたのは、1969年のことだったが、近代化を促進する政府の方針もあって、欧米で流行るようになったミニスカートがカイロ市内でも目にするようになっていた。ミニスカートでなくても、多くの女性が普通丈のスカートを履いていたし、半袖のブラウスは普通に着られていた。しかし、その後はカイロへ行く度に若い女性のヴェール姿が増えてきた。

この間も、それぞれの社会にあって自由と男女平等を求める女性たちの運動は、犠牲を産みながらも止むことはなかった。第5巻には、勇敢な女性たちの様々な運動の成功と失敗が描かれていて、胸が痛くなる。同時にインドネシアなどの、女性がヴェールを被る習慣が少なかった地域でヴェールを復活させようという運動も興味深い。宗教回帰の現象も様々であることが理解できる。

筆者は、クルアーンの教えを絶対的な命令として、これに忠実であることが、女性信者の心の安寧につながるのであれば、ヴェール問題などを取り上げるのはジェンダー・オリエンタリズムにすぎないという批判をあびたことがある。しかし、ムスリマたち自身が男女平等を望んでいるのであれば、その運動に暖かい応援を送りたくなる。

また筆者はクルアーン第24章31節のヴェールに関する章句(「外に現れ出るもののほかには彼女たちの美しさや飾りを目立たせてはならない。そして覆いをその胸の上にかきなさい」)についても、この章句は女性を守るための教えではなく、むしろ男性を性的欲望から制御するために設けられた規定である」と理解したい。本書に纏められたイスラーム世界のジェンダー問題に関する調査報告は、筆者にも勇気を与えてくれるものである。

第6巻は『うつりゆく家族』として、主に「家族」の実態や構成、イスラーム家族法とのかかわり、また時代に即した社会構造の変化によって発生する家族内の問題をも描き出している。近代の百年間という、世界史的に大きな変革の時代にあって、国や地域を問わず、それぞれの家族の暮らしは外界の変化に影響を受けながらも、互いに似ている面がみられる。

またそれぞれの家族は、社会の変動から大きな影響を受けることもあり、植民地支配や民族運動、独立戦争や政治的変動など、時代の変化によって、悲劇が生まれる場合もみられる。

それでも家族の結束は母親を中心として守られることが多く、母親の死によって家族の分裂が始まる様子は、洋の東西を問わない。

こうして丁寧に仕上げられたフィールドワークから、イスラーム世界の「家族」の在り方を考えると、現在の日本の「家族」の在り方も見えてくるように思える。懐かしく、そして悲しい「うつりゆく家族」はイスラーム世界だけの問題ではないということを、教えてくれる研究である。

## 『イスラームの内と外から、鎌田繁先生古稀記念論文集』

森本一夫・井上貴恵・小野純一・澤井真 編

ナカニシヤ出版、2023年3月31日出版

ISBN978-4-7795-1716-7, 8000円＋税

東京大学東洋文化研究所の教授職を定年退職して、名誉教授になったとしても、古稀の記念に31人もの「弟子」たちから、それぞれの研究テーマによる論文を提出され、それをまとめて分厚い論文集を出版して捧げられる研究者が、何人いるであろうか？

鎌田繁先生は、その稀有な名誉教授であろう。

私事になるが、私は39歳になる数日前に東京大学大学院修士課程に入ったが、主指導の先生のご指導は大変に厳しく、年を取った

私には、とても辛い日々が続いていた。そのようななかで、無口でもいつも暖かく支えてくださったのは、当時、東京大学文学部イスラム学研究室の助手をしていた鎌田繁先生だった。鎌田先生はご多忙の中でも、私のつたない投稿論文を丁寧に見て下さり、誤字脱字まで見逃すことなく訂正してくださった。研究には厳格でも、いつも優しいお人柄の先生には、多くの研究者がお世話になったことと思われる。それがこの重厚な感謝の研究書となって、先生に捧げられたのだと確信する。

31人の論文を掲載した論文集は668ページにも及び、片手で持ち上げるのも苦勞するほど重い。内容はもともと執筆者が自分の希望するテーマで自由に記述するものとされたために、編集を引き受けた森本一夫先生を中心とする4人の研究者の苦勞は並大抵のものではなかったと思われる。執筆者が各自で書きたいテーマを選んだために、全体を8章に区分けすることも、想像を絶するほどの苦勞があったことと確信する。それらは次のように編集されている。

- 第一部 方法を論じる
- 第二部 先人の足跡を見定める
- 第三部 アブラハムの宗教を探る
- 第四部 イスラーム神秘主義とその周辺
- 第五部 諸分派の知的営為
- 第六部 イスラーム諸学の展開—前近代—
- 第七部 イスラーム的知の近現代的展開
- 第八部 世界の哲学的・科学的把握

こうして収録されたものは、一つ一つは短い論文であるが、31人の研究成果が丁寧にまとめられた珠玉の研究発表の場でもある。定価8000円という高価な研究書になったが、イスラーム世界に関心がある人だけでなく、できれば多くの人たちに、本書を手を取っ

てみてほしい。そのためには大学や研究機関の図書館には、是非とも備えていただきたいと念願する。

なお筆者の駄文は筆者の年齢も考慮されたものと思うが、本書の最後に（トリを務めた形で）31章に置かれている。編集者諸氏に心から感謝する次第である。

（担当・塩尻和子）